

天地

ネットワーク テーブル 485号

天地シニアネットワーク 2018

8. 12. 18

TENTĪ TODAY			1
会員の広場	<動画>		2
連載作品			2
随 想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ 60. 双子のパラドックス	伊那 闊歩	2
随 想	天皇陛下と皇室を考えるー(下)	臺 一郎	6
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語(57) 北野線の古制1・北野天満宮(484号つづき)	大竹 漢洲	9
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		11
事務局			12

TENTĪ TODAY

今年、最後の「天地・ネットワークテーブル」になります。月に2回発信(原則)していましたが今月は1回になりました。この一年、いろいろとご支援、ご協力有難うございました。途中でダウンかなと予想していましたが、年末まで何とかたどりつきました。感謝!感謝!です。

今年、トランプ政権の出現により、戦後続いてきた米欧中心の世界が、大きく変わりました。来年以降、我々世代が体験してきた世界が、どう変わっていくのか興味深々であり、また心配ですが、その展望口、発信口として<天地シニア>のような任意のシニア集団があってもよいのではと、最近改めて感じています。

来年は、先行き不透明な一年が予想されますが皆様の願い、思いが叶うような良い年となりますように心からお祈りしています。

定年退職後に、地元徳島の美郷地区で特産の梅を原料にして、梅酒の製造販売に孤軍奮闘している東野宏一さんご夫妻を、天地シニアでずっと応援していますが。東野さんから、今月27日(木)のNHK「あさいち」で美郷の梅酒造りが紹介されるとのご案内が届きました。ご夫妻も登場するようですので楽しみにしているのですが、<失敗しない家庭での梅酒づくり>というようなコーナーもあるようですから、時間のあるかた、ぜひ、「あさいち」をご覧ください。

製品は最高です。東急ハンズが、積極的にとりあげてくれ、置いてある店舗が増えているそうですので、お求めの際は、お近くの東急ハンズへお出かけ

ください。

会員の広場

臺一郎氏の「天皇陛下と皇室」興味深く読みました。「上」に続く「下」を待っています。 大須賀四郎

「動画」 yaku5151 (小泉)

11月中旬から25日まで、JR青梅線「御岳駅前」の御岳溪谷ライトアップが行われていました。日本画の巨匠「川合玉堂」美術館前の大銀杏の黄葉が見事でした。今年は夏以降の寒暖の差が異常なようでしたが、それが幸いしたのかこの地域では例年と比較にならない程の美しさが見事でした。また、青梅より3駅先の「石神前駅」前のブリジストン「奥多摩園」と昼の御岳溪谷の紅葉・黄葉にも目を奪われそうな景色を楽しんで来ましたのでご覧下さい。

1) 御岳溪谷ライトアップの大銀杏 (11月19日)

<https://youtu.be/MksI6nLKYTQ>

2) ブリジストン「奥多摩園」の見事な紅葉・黄葉の美 (11月26日)

<https://youtu.be/sKV6TlvInq0>

3) 御岳溪谷の紅葉・黄葉を歩く - 1 「上流」 (11月26日)

https://youtu.be/0wIejd0_bXY

4) 御岳溪谷の紅葉・黄葉を歩く - 2 「下流」 (11月26日)

<https://youtu.be/SexcpEDlgYo>

連載

天のわざ、地のほまれ

—地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

60. 双子のパラドックス

前回まで、特殊相対性理論から帰結するいくつかの奇妙(奇怪)な現象 — 高速で走っている物体は、前後に縮んで見るとか、時計の進み方が遅くなるなど — について見てきたが、今回もまた特殊相対性理論のハイライトのひとつ「双子のパラドックス」について考えたい。双子のパラドックスとはこういうことである。

「地球上に双子の兄弟がいて、兄が超高速宇宙船にのり、遠くの天体(*1)へ

と宇宙旅行する。超高速で移動する物体の時間は遅れるので、兄は弟に比べてゆっくり歳をとる。その結果、宇宙船が地球にかえってきたとき、地球上に止まっていた弟の方が兄より歳をとっていることになる。」

ここまでは、相対論によるひとつの奇妙な現象を記述しただけだが、ここからがパラドックスである。すなわち

「運動は‘相対的’なのであって、兄から眺めれば弟は地球とともに猛スピードで遠ざかって、兄が帰還する際には弟が猛スピードで近づいてくるのであるから、兄から観察すれば、運動しているのは弟の方にほかならない。それゆえ相対論が正しければ、兄ではなく弟の方が若くなっているに違いない。」

以上ふたつの推論は、おたがいに真逆の結論つまりパラドックスに導くというわけだ。はたしてこんなことが現実に起こるのであるだろうか。アインシュタインがこれを提唱して以来、専門の研究者だけでなく哲学者や相対論オタク、アマチュアたちも巻きこんで広く論議を呼んできた問題である。

特殊相対論を胡散臭く思っている人たちはこう主張するのだ：そもそも若返りの薬品など（あったとして）服用したわけでもないのに、宇宙旅行してきただけで若返るなどありえないではないか。それゆえ特殊相対論は誤りである・・・。

一方‘双子のパラドックス’の問題を厳密に取り扱うためには、特殊相対性理論の範囲内では無理で、一般相対論によって解決しなければならない、と物理学者たちは言うかもしれない。なぜなら、兄が乗った宇宙船は目的地に着いた後、方向転換して地球に向かう。慣性系なら直線運動をする力学系（の集合）であるから、物体のスピードが速くなったり遅くなったり、さらに方向が変わるということはない。もし運動している物体の運動方向が変化したなら、その物体は外力を受けたことを意味するので、もはや慣性系の範囲を逸脱し、特殊相対論では解決不可能であると。

結論を言えば、双子のパラドックスを特殊相対論によって論ずることはできる。そして、宇宙旅行を終えて地球に帰還した兄は、現実に歳をとってはいないのである(*2)。

双子の弟は普通に歳をとって老人になっているのに、兄は宇宙旅行してまだ20代の青年であるということは原理的に起こり得るのだ。ただし、不自然な点をいくつか容認しなければならない。たとえば、宇宙船は地球をはなれた途端、一瞬のうちにそのスピードは超高速にならなければならない。宇宙船が目的地に到達した時には、また地球に帰還したときにも、そのスピードは一瞬のうちにゼロになるとしなければならない。宇宙船のスピードは徐々に増していくのではなく、一瞬のうちに一定のスピードに達すると仮定するのである。そのようなことが可能であるとして以後考えるが、本質的な点は特殊相対論で十分説明可能なのだ(*3)。

そのためにここでもう一度ローレンツ変換とミンコフスキー・ダイアグラムについて復習しておこう。慣性系 $S(u, x)$ を直交座標として図に描いたも

のが、fig.1の(a)である(*4)。ここで更に慣性系 S' (U, X) を導入する。

S' は S から見て x 軸の正の向きに速度 v で移動している。時間 $t = T =$

$0, x = X = 0$ を両座標の原点として、 S と S' を重ねて描いた図が fig.1

(b) である。傾きが ± 45 度の青色の直線は光が通過する道 (光の世界線、 $x =$

$ct, x = -ct$) である。緑色のふたつの直線が S' の座標軸 (U 軸と X 軸) で

ある。こうして出来上がった図をミンコフスキーは「世界図」とよんだ。物

体の運動は、世界図の中に「世界線」として描かれる。慣性系 S と S' とは

ローレンツ変換：

$$U = \frac{u - \beta x}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad X = \frac{x - \beta u}{\sqrt{1 - \beta^2}}$$

によって結びつけられているために、 S' は緑色の斜交座標で表されること

になる。この公式から直ちに次の関係式

$$U^2 - X^2 = u^2 - x^2$$

が得られるが、ここで $U^2 - X^2 = u^2 - x^2 = 1$ として図に描き加えたもの

が fig.1(c)の赤線である。赤線は、光の道を漸近線とする双曲線である。こ

こで $x = 0$ とすれば $u = \pm 1$ となり、図では赤線と黒縦線の交点になって

いるが、上側の交点については「 S の原点に居る観測者 ($x = 0$) がそのままじ

っとして1年経過 ($u = 1$) した」と解釈しよう。つまり、黒縦線は S の

$x = 0$ にとどまっている観測者の (4次元の) 世界線と解釈する。この赤線

は S' の双曲線： $U^2 - X^2 = 1$ でもあるから、赤線と緑線との上側の交点は

S' の1年目を表す。 U 軸は S' の $X = 0$ に留まっている観測者の世界線と

解釈される。fig.1(d) にはさらに2年目、3年目に相当する双曲線の上の部分

(時間軸の未来に相当) を付け加えてある。

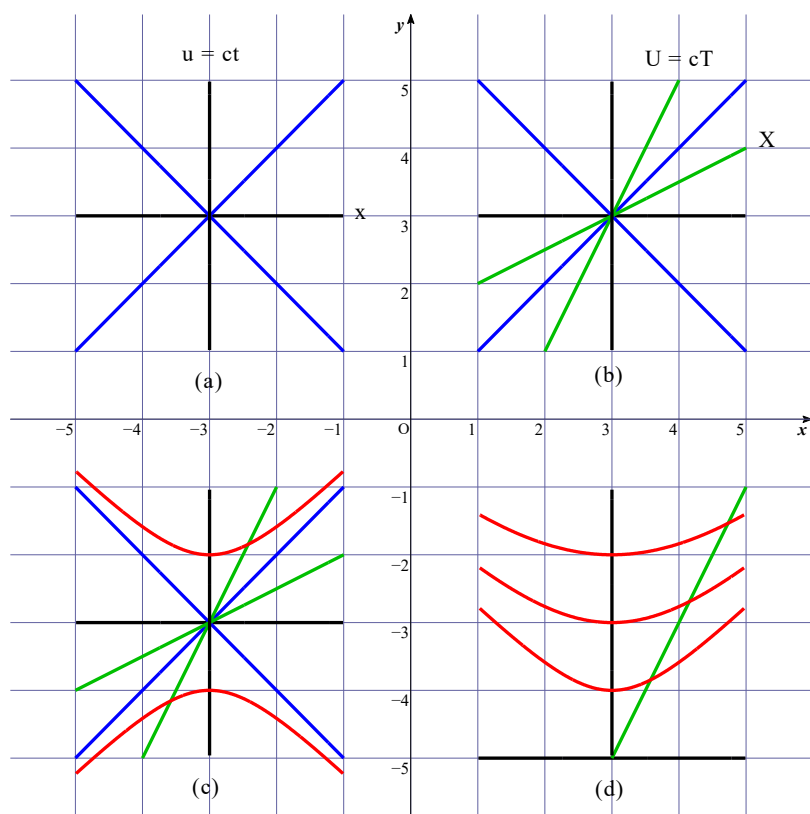
u 軸 (黒縦線) との交点は等間隔に並んでいるが、 U 軸との交点も等間隔

に並んでいることに注目されたい。ただし、その間隔は、 S と S' とで異な

っている。つまり、ローレンツ変換によって各座標の目盛りは変化するので

ある。

fig.1 S および S' の世界図

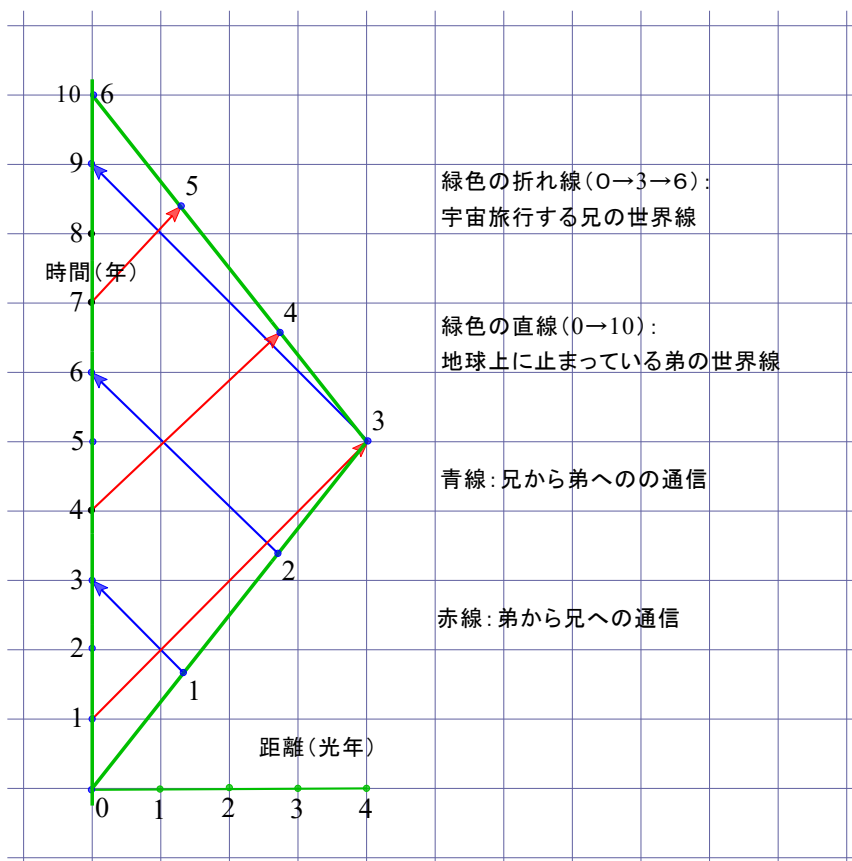


以上で特殊相対論の枠組みとローレンツ変換、ミンコフスキー・ダイアグラムについての復習と「双子のパラドックス」解決の準備はととのった。具体的に兄と弟がたどる道筋(世界線)を **fig.2** のように設定して考えてみよう。

地球上にいる弟の時間を t とし、宇宙船にのっている兄の時間を T とする。兄が搭乗した時点を中心にとり、そこで $t = T = 0$ とする(図左下の0)。兄は光速の80% ($\beta = 0.8$, $\sqrt{1 - \beta^2} = 0.6$)という猛スピードで4光年離れた恒星を目指して宇宙船に乗って旅立った。兄が目的地に到達し、ただちに逆転して復路についたとしてもこの宇宙旅行に要する時間は、 $t = 8 / 0.8 = 10$ 年となる。

弟の世界線は図の緑色の縦線(0 → 10)である。一方、兄の往路の世界線は緑色の直線(0 → 1 → 2 → 3), 同様に復路の世界線は緑色(3 → 4 → 5 → 6)である。弟の世界線は真っすぐであるのに反して、兄の世界線は折れ曲がっているということが大きな違いなのである。

fig.2 地球にとどまる弟と宇宙旅行する兄の世界図



兄がこの宇宙旅行に要した時間 T は、 $T = \sqrt{1 - \beta^2} t = 0.6 \times 10 = 6$ 年 となる
 ことがわかる。両者が地上で再会した時、なんと兄は弟より 4 年も若い
 (歳をとっていない) ことになる。兄の時計の進み方が遅くなって、4 年の差
 ができてしまったのだ。この図をさらに調べてみると驚くべきことが明らか
 になる。目的地までの距離が 4 光年 (= 38 兆 5 千億 km) であるから、光の
 スピードで航行しても 4 年かかるはずであるが、兄は船内の時計でたったの
 3 年で目的地に到着していることになる。つまり、光速よりも速いスピー
 ドで走ったことになる。弟から観察すれば、宇宙船のスピードは決して光速を
 超えない。にもかかわらず、船内の旅行者は、あたかも光速を超えて走っ
 ているかのごとく旅行時間を稼げる (短い時間で目的地に到達する) のだ(*5)。

fig.2 の赤線は弟からの通信、青線は兄からの通信である。弟から 1 年後の発
 信を兄は目的地に到着して 3 年後に受信し、兄からの到着通知は弟に 9 年後
 に届くことがわかる。兄の往路で 1 年毎の発信を弟は 3 年毎に受信する。復
 路での兄からの 1 年毎の通信を弟は 9 年目から 10 年目の一年間に 4 か月毎
 に 3 回受信するのだ。

(*1) 太陽の近くにある恒星のうち、もっとも近くにあるものは 2018 年 12 月
 現在、ケンタウルス座の 1 等星 = α 星は 3 つの恒星から成る 3 重連星、その
 平均距離 4.36 光年とされている。そのうちのひとつ、赤色矮星プロキシマ・
 ケンタウリは、その距離 4.246 光年であるという。明るさは 11 等級である
 から、肉眼では見えない。これらは多くの惑星をともなっていると見られ、
 そのうちいくつかには、生物が生息できるかもしれないと言われている。

(*2) 高名な免疫学者で文筆家の多田富雄氏 (1934-2010) の能楽「一石仙人」(一石はドイツ語でアインシュタイン) は相対性理論を題材にしており、たいへん興味深い。

(*3) 松田卓也、木下篤哉「相対論の正しい間違え方」

(*4) ここで $u = ct$ 、 $U = cT$, c は真空中の光のスピード、 t および T は時間。一般には空間の y, z 成分も合わせて S は 4次元空間になるのだが、 x 軸方向だけの移動を考えているので y, z 成分は省いて時空は 2次元として世界図を描いている。

(*5) 宇宙船のスピードが大きくなればなるほど、換言すれば、スピードが光速に近くなればなるほど時間の遅れは大きくなる。極端な場合、光(という生物がいたとして)はどこに行くにも時間がかからない。光を外から眺めると、そのスピードは 30 万 km/秒であるから、光が進むときには時間がかかる。しかしながら、光自身が感じる時間は無限に遅くなっている、つまり、時間は消失していて、結果として光の寿命は無限大であると推論できないであろうか。

天皇陛下と皇室を考える - (下) - 臺 一郎

前回のメルマガにも書いたように、今上天皇や美智子妃殿下に対して国民の大多数は敬愛の念や親愛の情を抱いていると思う。筆者もその一人だが、例え親近感を抱いても、天皇陛下や皇室をテーマに他人の目に触れるような形で、例えばメルマガなどで文章を書くとなると正直少し緊張する。

日本人なら大概そうだろう。これが総理大臣や各省大臣、与野党の幹事長や書記長などの政治家とか有名な財界人に対しての記述ならば、平気で厳しい批判や非難、時には侮辱的な悪口や文句も遠慮なく書けるのだが。

表現の自由や国民の知る権利をしばしば声高に主張する大手新聞社などのベテラン記者や高名なジャーナリストといえども、天皇陛下や皇族方についてのコメントや記事となると、心理的にブレーキが働いて抑制された文章になったり表現が慎重になるのではないだろうか。

なぜか。理由の一つは、陛下を厳しく叱責するとか侮辱するようなことを書くと、極右系などの団体からの不気味な反応があるかもしれないという怖さがあるからではないだろうか。もう一つは、多くの日本人の意識の中に、天皇陛下や皇室を批判したり非難したりすることは控えるべきという、昔からのある種の暗黙の戒めや心理的自縛のようなものがあるのかもしれない。

さらに、我々一般国民は天皇陛下や皇室についての知識や情報が乏しく、良く知らないために、そもそも意見や見解が述べにくいという点もあるだろ

う。例えば、天皇陛下や皇族方の人柄や思想、趣味や関心事、こだわりや好み、得手や不得手、日常生活や家庭人としての行動などについては、我々一般の民間人は、週刊誌などがたまに書く記事を通してごく表面的なことを知る程度である。また皇室典範などの関連法もなんか専門的で難しそうな感じがして読む気がしない。

実は以前に自分の本を書いたときに、天皇陛下の日常について少し調べたことがある。天皇陛下の毎日は我々の想像をはるかに超えるご多忙さである。一般人がくつろぐ週末や休日ですえ、天皇陛下には様々な公務や行事がスケジュールに入っていることを知り、とても驚いた。ごく簡単にだがその一部を紹介する。

天皇陛下の行為や活動は大きく3つに分類される。第一が国事行為、第二が国事行為を除く公的行為、で第三が私的行為である。

第一の国事行為には、内閣から届く年間1000件にも及ぶ書類の閲覧、国会の指名した内閣総理大臣の任命、各省大臣の任命、最高裁判所裁判官の任命、年間30人以上となる海外から赴任の各国大使の信任状認証などがある。第二の公的行為には、外国のご訪問、国内各地のご訪問、新年祝賀の儀、文化勲章の授与、海外からの国王や大統領との面会や晩餐会の主催、戦没者追悼式への出席、激甚災害等の被災地へのお見舞いなどがある。そして第三の私的行為には宮中祭祀、コンサートや展覧会などの観覧、大相撲の観戦、生物学などの研究、家庭人としての活動や時間などである。

これらの中で、我々がほとんど実態をしらない行為の一つに宮中祭祀がある。これは宮中三殿（賢所、皇霊殿、神殿）といわれる皇居内の神社のような施設の中で、天皇陛下が国家の安寧と国民の幸福を祈る行事である。宮中祭祀の祭儀は年に20件以上あり、祭儀ごとに天皇陛下が身に着ける古式装束も厳密に定められている。代表的な祭儀としては神嘗祭、新嘗祭、四方拝、歳旦祭などがある。最近秋篠宮文仁親王の記者会見での発言が話題となった、大嘗祭もこうした祭儀の一つである。

宮中三殿に空調設備等は一切なく、しかも天皇陛下には猛暑だから薄着にするとか、厳寒だから厚い下着でといった服装の調整も許されないという。厳冬期の夜もまだ明けぬ早朝から実施される祭儀もあるようで、今上陛下のようなご高齢の天皇にとっては、肉体的にもかなりきついと思われる。さらにこうした祭儀のほかにも、陛下は年間200件（平成23年の場合）近い行事に参加乃至は出席されていたが、3年程前からはその一部を皇太子の徳仁親王に交替されたようだ。

ちなみに2015年の1年間に天皇陛下が休日として休まれた日数はたった77日だそうである。週休二日制が定着している今日、役所や民間企業に勤める一般サラリーマンですえもが年間120日位は休んでいることを考えると、80代というご高齢な天皇陛下の77日という休日数はいかにも少なくお気の毒な気がする。

今上天皇のご趣味については、麻雀、音楽、パソコン、自動車の運転などがお好きのようだ。もっともドライブとはいっても、外の一般道などは走らず、もっぱら皇居の中でたまに運転を楽しむ程度らしいが。また、得意なのは馬術や百人一首などで、特に百人一首は抜群にお強いという。食べ物でお好きなのは、カレーライスや東京駅のチキン弁当との記述もあり、ちょっと微笑ましい。

お人柄について池上彰氏は著書で、『すばらしい方』と書いているが、陛下を良くご存知の方々も誰も詳しくは語らないのでわからない。写真やニュース報道の動画映像などを見る限りでは、とてもお優しい穏やかな方のように見える。特に美智子妃殿下に対しては、陛下の深い感謝と思いやりの気持ちが溢れるように感じられる。若い学生時代には、警護の者たちの目をごまかして友人達と銀ブラを楽しみ宮内庁や警視庁をあわてさせたなどのエピソードもあり、案外好奇心が強く茶目っ気のある方なのかもしれない。ともかく常に国家国民が最優先で、徹底した《無私無欲の方》との紹介をしばしば目にする。

こうしてみると天皇とは中々大変なお立場というかご身分のようで、我々のような普通人には一週間も持たない感じがする。とは言え、前回書いたように世界最長・最古の王朝である天皇家や皇室の存在は、国際社会における、他国には真似のできない日本ならではの非常な強みであり魅力であることを考えると、これからも日本国のある限り、末永く続くことを望みたい。

それにしても日本の皇室は少し拘束が強すぎるし、お仕事が多すぎるし、国民との距離があり過ぎるような感じがする。英国を始めとする欧米の王室はもう少しオープンだし、自由度が高いし、拘束が弱く、休暇なども多く、一般社会から日本ほどは隔絶されてはいないのではないだろうか。天皇陛下や皇室も、せめて欧米の王室並みの自由度にして差し上げられないのだろうかと思うのは自分だけではないだろう。

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（５７）

大竹漢洲

北野線の古刹 1・北野天満宮

（４８４号のつづき）

昨晚のNHKニュースで京都の紅葉の見所に、北野天満宮の「御土居」のライトアップされた美しい紅葉が紹介されていました。朱塗りの橋を背景にした紅葉は見事でした。「御土居」をご存じですか？ 歴史的な遺産です。関東人は目にした人は少ないかも知れません。

本殿から西に歩いて行くと、大きな工事跡のように剥き出しの溝が見えてきます。紅葉の見頃の時期は、北野天満宮も商売っ気を出して入場料を徴収していました。お茶に団子付で600円ですが、美しい紅葉が見られるのであれば安いものです。

「御土居」とは、天下統一した秀吉が長い戦乱で荒れた京都の都市改造の一環として、外敵を防ぐための防塁と、鴨川の氾濫から市街を守る堤防として築いた土塁のことを言います。「御土居」の長さは22,5Kmにも及び、東は鴨川・北は鷹ヶ峰・西は紙屋川、南は九条辺りまで築かれました。土塁の内側が洛中、外側が洛外と呼ばれるようになりました。時々、吟じる徳富蘇峰作の「京都東山」の“洛中洛外”の意味を初めて知った次弟です。各要衝の地には、七口を設けて洛外との出入口にしました。

今日まで名を残している地名は七口の中で、「栗田口」「鞍馬口」「丹波口」の三口です。江戸時代になると天下泰平の世となり、都も人口の増加に従って洛外に市街地が広がったこともあり、堤防の役割を果たしていた土塁が、次々に取り壊されていきました、北野天満宮の「御土居」は安土桃山時代の貴重な文化遺産です。

「御土居」は紅葉の盛りで、美しい隠れた名所です。最初は土手の上から、時計周りとは逆に右手に進むと、直ぐ右に真っ赤な紅葉の間から権現造の本殿が姿を現し、左は紅葉樹が茂る葉間から「御土居」の姿が見え隠れしてきました。大量の土砂を掘り起こして、大きな溝を造る作業は、当時としては大工事であったに相違ありません。時の権力者太閤秀吉が存在していたからこそ、22.5kmの溝と堤が完成しています。

朱塗りの橋が見え隠れしています。陽に明るく照らされた朱塗りの橋と、影に成った溝の部分とが対照的です。昨晚のニュースで紹介された割には人の数も少なく、岩倉・実相寺ほどではありません。何が良かったと言え、スピーカーも音楽も無かったことです。橋の中程に立っています。紅葉を見上げてよし、前後もよし、橋の下も紅葉樹の間から見える溝を、散り紅葉を運んで勢いよく音を立て流れる水を見るのも良い景色です。

「御土居」の横幅は30m近くもあり、一段下がった一番低い所に溝が掘られています。この溝は本来河川です。紙屋川（天神川）と呼ばれています。「御土居」の壁の所々に大小土管の残骸が姿を見せています。想像するに御土居の水抜き管か、下水管か、上水道管かでしょう。橋を渡り溝に沿って歩きました。

散策にはコースも、季節も良く気分上々でした。溝に架かる小さな橋を渡って坂を上がり、元の台地に到着です。茶店でお茶と団子の接待を受けて一休みです。お茶である事を思い出しました。妻は御土居の紅葉の美しさを話していますが、上の空です。

そうだ!秀吉は北野で大茶会を催している。天正15年(1587年)に北野天満宮で催された正確な大茶会の呼び名は「北野大茶湯」です。開催に先立って秀吉は千利休と津田宗及を伴って、神前に参籠しています。催しに際しての子細な打ち合わせをしたことが想像できます。しかし理解できないのは、秀吉の「北野大茶湯」の目論みです。何故に北野天満宮で催したのか、

何故に1日で終えたのか、理由は何であったのか、関心のある所です。

催した目的は、九州島津征伐の戦勝祝いとも、盤石な豊臣家の印象づけとも言われています。九州征伐戦勝祝いであれば、九州に所縁の深い道真公の霊が眠る天満宮で催したことは納得できます。

肥後で一揆が起こった理由で、予定していた10日間を1日で切り上げていることは理解できません。遠隔地の九州で発生した小さな一揆ぐらい、豊後に隠居している黒田官兵衛に任せておけば問題は無いと、考えるのが一般的です。あれ程に周到な準備をして、楽しみにしていた秀吉が「大茶湯」を一日で中止しています。余程の理由がなければなりません。

矢張り九州の一揆に関わった政局絡みかもしれない？。官兵衛が立つ！。張本人は官兵衛か？。

「北野大茶湯」は10月1日、わずか1日で中止されましたが、盛大に行われたことが記録に残されています。秀吉秘蔵の名物茶器類は、神社の拝殿に展示され、中央にはあの黄金の茶釜、左右には名物茶器が置かれました。神殿の前面には、四畳半茶席が設えられ、秀吉・利休・宗及・宗久が茶頭役を務めました、茶道具は全て秀吉自慢の名物茶器類でした、秀吉自ら境内に作られた茶室を回り、わび数奇の席を愛でて、茶を楽しんだとも言われています。

「北野大茶湯」は拝殿内、神殿前、境内で催されたことは、秀吉の行動で知ることができました。記録には、松原に並んだ数寄者”と書かれてあります。

「北野大茶湯」は広い境内一杯に催されたことは、想像に難くありません。

境内には梅樹と共に多くの赤松が植えられています。赤松の下に莫菴や毛氈を敷いて茶席にしたことを”松原”と譬えたのでしょうか。”松原”には800とも1500とも言われた数奇者の囲いが、作られたと記録に残されていますが、秀吉の命で中止されています。庶民たちも”一日天下”を味わったのかも知れません。

北野天満宮を参拝した後、平野神社に回る予定でしたが、空腹を感じて時間を見ると、昼近くに成っていました。北野天満宮前交差点を渡った先の路地を入ったうどん屋「たわらや」を思い出しました。変わった“うどん”を出す店です。歴史のある老舗です。学生の頃から時々訪ねています。長さが10cmもある極太麺で、生姜味を効かした昆布出汁の正に関西風の味です。見た目は一風変わった“うどん”です。一度食べると、忘れられない味とカタチです。

北野天満宮前のバス停から西今出川通を東に進むと、上七軒の交差点に出ます。かつて上七軒は、祇園や先斗町に肩を並べた色街でした。上七軒は、秀吉が催した「北野大茶湯」とも深い関わり合いを持ち、“お茶屋”発祥の地としても歴史のある色街です。

時は室町時代の文安元年(1444年)です。落雷で天満宮社殿の一部が焼失する火災が発生しました。時の将軍足利義植は、所司代細川勝元に命じて社殿を造営させました。その際に社殿を修築した残材を用いて、東門前の松原に七軒のお茶屋を建て、参詣者の休憩所にしたのが上七軒の始まりです。

天正15年(1587年)に開かれた「北野大茶湯」では、上七軒付近は、時な

らぬ賑わいを見せ、当日、このお茶屋が秀吉公一行の休憩所として使われて、御手洗団子を献じたところ、大層なお褒めの言葉を頂いて以来、お茶屋で「五つ団子紋」が用いられるようになりました。今日まで伝統は続いています。

以前ですが、上七軒のあるお茶屋に上がった経験があります。京都新聞社の内田汎識専務のお伴でした。一見の客に見られずに、心良く迎え入れられ、楽しいひと時を過ごすことができ、得難い経験をさせて貰いました。懐かしい思い出です。余り肩の張らないお茶屋であった事を記憶しています。お陰でお茶屋とか、置屋の違いとか、仕出し屋とか全体の仕組みを知ることでもき勉強にもなりました。

一方ではお茶屋の経営の厳しさも知りました。かつては上七軒も赤松林に囲まれ、洛中の外れの鄙びた村落でした。秀吉は「北野大茶湯」の下見で、七軒の並んだお茶屋の“寂びた”景色に強く惹かれて、この地で茶席を設けることを命じたに違いありません。今は、喧噪の渦と中にある街です。夜になり「五つ団子紋」に灯が入れば、違った顔が表れてきます。

文化講座・講演会

奈良興寺文化講座 2019年1月17日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

「お釈迦さまはかく語りき・・・漢訳法句経を読む2」

興福寺副貫首 森谷英俊

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」

興福寺 貫首 多川俊映

会場：（学）文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

（JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分）

第102回 新三木会 講演会のご案内

- 1、 日時・会場 2019年1月17日（木）13:00～15:00
- 2 『日中関係、過去・現在・未来』 一橋講堂（会議室）
石平氏 評論家 元拓殖大学教授
3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokokukai@gmail.com
Tel: 047-464-4063
フルネーム：一般・天地シニアネットワークと伝えてください
- 4、会費：2000円 婦人1000円 学生無料
5. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

6 今後の予定

第 103 回 2 月 21 日 (木) 『米中経済戦争と習近平の闘い』 スターホール
富坂 聡氏 中国関連ジャーナリスト・拓殖大学教授

事務局

< 投稿 > < 図書 の 推薦 > を 歓迎 します。

< プリント 版 ・ 郵 送 >

メール 版 を 編集 して プリント 版 を 月 に 1 回 発行 郵 送 して います。

お 申 込 み ぐ だ さ れ ば お 送 り します。一 応、実 費 と して 1 月 3 5 0 円 (4 2 0 0 円 / 年) を いた だ いて お り ます が、強 制 する も の で は あ り ませ ん。

< 振 込 先 > 振 込 先 : 三 井 住 友 銀 行 「 神 田 支 店 」 (普 通) 7 8 7 1 5 3 2
(口 座 名) テ ン チ シ ニ ア ネ ッ ト ワ ー ク

天地シニアネットワーク・テーブル・485号

発行：2018年12月18日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-

1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651